



TITLE:

國際經濟會議

AUTHOR(S):

汐見, 三郎

CITATION:

汐見, 三郎. 國際經濟會議. 經濟論叢 1927, 25(2): 293-300

ISSUE DATE:

1927-08-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128563>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 二 第

卷五十二第

行發日一月八年二和昭

論 叢

營業稅の課稅標準

法學博士 神戶 正雄

文化現象の凝集作用

法學士 恒藤 恭

意味現實態

文學博士 米田庄太郎

國家の組織

法學士 作田 莊一

近世の港

文學博士 三浦 周行

說 苑

リカ
アド 勞賃論と
サス マル人口原則

經濟學士 森 耕二 郎

植民及び植民地の意義

經濟學士 長田 三 郎

雜 錄

フ
ォードの勞賃論

經濟學士 星野周一 郎

一九二六年度の英國銀行界

經濟學士 道上 清治

國際經濟會議

法學士 沙見 三 郎

國際經濟會議

沙見三郎

一

國際經濟會議は、本年（一九二七年）五月四日

ジュネーブに開會、五月二十三日に終了を告げたのである。參加國數約五十、代表者數約二百に上り、近來稀に見る大規模の國際會議であつた。

國際經濟會議は、その起原を一九二五年九月二十四日の國際聯盟總會に發してゐる。聯盟總會は、世界の平和を確立せんが爲めに、あらゆる手段を講せんとしてゐる、而して經濟上の平和なるものが世界の平和を齎す最も有力なる手段である事を認めたのである、故に苟も世界の經濟的繁榮を妨ぐるが如き障害あらば、其性質を明かにし、此等の障害を克服する事により世界の平和に禍いするものを除かねばならぬ事となる。國際經濟會議なるものは、聯盟總會の此精神の表現に外ならないのである。一九二五年の第六回聯盟總會の決議に基き、先づ國際經濟會議の準備委員會が組織せられた。準備委員會は聯盟事務局、國際商業會議所其他の援助を得て準備を整へ、遂に本年五月の國際經濟會議の招集を見たのである。

國際經濟會議は世界大戰後開かれたる經濟會議の中で最も重要なものの、一に數へられてゐる、否な最も重要な國際會議なりと云はれてゐる。一九二〇年に開かれたブラッセルの財政會議は戰後の財政及び通貨の問題を論じたのであるが、賠償金問題に觸るべからずその制限を受けてゐたのである。更にゼノア會議の開かれし際は獨逸佛國の政治及び經濟關係が尙緊張せし時とて、これ亦充分の成果を收め得なかつたのである。然るに今や歐洲大戰の善後策も一段落を告げ、茲に國際經濟會議を開き各國民の腹藏なき聲を聞く機會が到來したのである。特に露國と瑞西との懸案が解決せられ、露國代表が聯盟理事會の招待を受け會議に列した事は、國際經濟會議を一層に有意義ならしめたのである。かくて從來の國際會議が何れも目前に迫れる難問題の解決に煩はされてゐたのに對し、今度の國際經濟會議は世界經濟の前途に對し永遠の策を講ずると云ふ長所を有してゐるのである。

我國が國際經濟會議に代表を派遣した關係上、會議の模様其他につき我國には可なり詳細なる報道が試みられてゐる。茲には重複を避け、専ら國際經濟會議の開催を必要とするに至つた世界經濟の狀勢と國際經濟會議の中心題目たる關稅問題とにつき、聯盟事務局の調査したる數字的材料を紹介したい。此等の參考材料は、事務局が世界各國の商工業團體及び専門家より蒐集したるものであつて、世界經濟の真相を知る爲めには、未だ嘗て發表せられざる詳細にして且つ正確なる報告なりと云はれてゐる。材料及び其註解は、殆んど四月三十日、五月二十八日、六月十一日 *Economist* 誌及び其附錄 *Economic Conference Supplement* に于つたのである。

二

先づ第一に、國際經濟會議の招集を必要とするに至つた世界經濟の事情を明かにする。

世界の經濟は世界大戰を中心として異常なる轉回を遂げたのである。世界大戰開始前即ち一九一三年と一昨年即ち一九二五年とにつき、世

界の物資と人口との割合に關する興味ある數字が發表せられてゐる。一九二五年の世界の人口は一九一三年に比し五%大である。然るに食料品原料品の生産額は其期間に一六乃至一八%増加してゐる。故に世界全體として考ふれば、凡ての物資の生産と消費とは、其全額に於ても又世界人口一人當りに於ても、戦前より大なるベキ筈である、然るに事實について見れば、この食料品及び原料品の増大なるものは、何等國際貿易の増加を來たしてゐない。即ち一九二五年に於ける世界の貿易額は世界戦争以前に比して僅かに五%を増すに過ぎないのである。國際經濟會議は國際貿易の不振をば、食料品原料品の増加が一地方に偏在してゐる事に歸してゐる。而して歐洲は恰も食料品原料品の増加の圏外に置かれてゐるのである。

戦前戦後の歐洲を比較するに、人口の増加割合が一%なるに對して國際貿易額は逆に八九%に減少してゐる。失業者の増加、重税の負擔の數字は、如何に戦後の歐洲が惠まれざるかを物

語つてゐるのである。歐洲經濟界の惡化は之が原因を二つの方面に求める事が出来る。一は世界大戰による歐洲それ自身の破壊であつて、他は米國、日本其他の新進工業國が世界經濟に進出して來た事である。かくて、歐洲は原料品を輸入し精製品を輸出するものなりとの原則は、歐洲それ自體の鬭争と新興勢力の擡頭とにより破られたのである。然し歐洲經濟界の不秩序は歐洲と云ふ大なる購買力を減少せしむる事となるが故に纏て世界の他の部分の損失とならざる

を得ない、従つて歐洲經濟界の惡化は即ち世界經濟全體の憂ふべき問題となると云ふのが國際經濟會議の解釋である。

歐洲經濟界の不安狀態は各種の重要工業について之を見る事が出来る。其代表的のものとして事務局は石炭、鐵鋼、造船、棉、機械工業、化學工業を擧げてゐるが、茲には我國に關係深きものとして特に棉と造船との數字を掲げる事とする。

第一表 百噸以上の商船の進水總噸數表

國名	一九一三年		一九〇九—一三年平均		一九一八—二〇年平均		一九二四年		一九二五年	
	千噸	%	千噸	%	千噸	%	千噸	%	千噸	%
獨逸	四四三・三	一五・〇	二五八・八	二一・〇	一七二・一	七・八	四〇六・五	一八・五	四〇六・五	一八・五
義株	三〇・三	〇・九	三・八	〇・六	四・六	〇・七	三・九	〇・二	七・三	〇・三
白丁	四・九	一・三	三・二	〇・八	四・六	〇・七	三・九	〇・二	七・三	〇・三
佛蘭	一六・二	五・三	一〇・一	八・三	四・六	〇・七	三・九	〇・二	七・三	〇・三
伊國	五・四	一・五	一・九	一・一	三・二	〇・六	三・五	〇・五	六・五	〇・五
太蘭	五・六	一・五	四・〇	一・一	四・一	〇・八	三・五	〇・五	六・五	〇・五
和蘭	一〇・三	三・二	八・五	三・五	三・三	二・一	六・八	三・六	三・六	三・六

國名	一九一三年		一九〇九—一三年平均		一九一八—二〇年平均		一九二四年		一九二五年	
	千噸	%	千噸	%	千噸	%	千噸	%	千噸	%
英國	一、九三三・三	五・〇	一、五四・八	六・九	一、六七四・七	二七・三	一、四九・九	六四・一	一、〇四六・六	四九・四
瑞典	一八・五	〇・六	一一・四	〇・五	五・四	〇・九	三・三	一・四	五・八	二・五
米國	二七六・四	八・三	二四四・六	九・四	三、二四九・九	五・九	三九・五	六・三	二八・八	五・九
日領植民地	六四・七	一・九	四九・九	二・〇	五九・五	八・四	七・八	三・三	五・八	二・五
英領諸國	四八・三	一・四	二七・五	一・一	二〇・七	四・五	四・九	二・〇	四・一	二・一
其他諸國	七五・一	二・三	五四・九	二・二	六六・五	一・二	二五・六	一・一	二五・三	〇・七
計	二、三三三・九	一〇〇・〇	二、四九九・九	一〇〇・〇	六、一三三・三	一〇〇・〇	二、三三三・八	一〇〇・〇	二、三三三・四	一〇〇・〇
相數（一九〇九—一三年を一〇〇とす）	一三三・九		一〇〇・〇		九〇・三		九〇・三		八八・一	

世界戦後に於て造船工業が如何に不振を極めてゐるかは第一表の新造船の統計によつて明かであらう。世界的船腹過剰より生ずる當然の結論ではあるが、歐洲の造船業の不況が更に歐洲の經濟界に悪影響を及ぼしてゐるのである。

第二表 棉工業の國別比較表

(イ) 棉糸の輸出(噸)

國名	一九〇九—一三年平均		一九二一—二五年平均		一九二一—二五年平均	
	年平均	%	年平均	%	年平均	%
英國	九六、九七	三三・六	七五、三七	三・四	三・四	七・五
伊太利	一三、四九	四・五	一五、二六	六・八	一五・七	一・五
獨逸	一四、五六	四・九	六、四七	二・九	四・一	〇・七
チニコスロバキア			一九、四八	八・七		

棉工業の方は造船と異り、決して世界的不況を示してゐるのではない。否な或る新興諸國に於ては戦後異常の發展を遂げたのである。棉糸及び棉製品の輸出統計として第二表を得たので

白耳義	佛國	印度	日本	日	其他の主要諸國
五、五八	八、四四	八、九二	五、四九七	二、八七三	二、五八七
一、九	二、九	三、〇七	一七、〇	四、〇	一〇〇・〇
八、九六	二、五五	二六、九六	四九、七〇	二二、三四	三、五〇九
四、〇	五、二	七、五	三、二	九、六	一〇〇・〇
一六、九	二六、六	八、九	九、六	一七、七	七、七

(ロ) 棉製品の輸出(噸)

英 國	米 國	伊 太 利	佛 國	日 本	チエコスロバキア	印 度	其他の主要諸國
五、六八	四、四九	四、九〇	四、三三	一〇、三六	三、七六	二、七六	七、三〇
六、九	四、四	五、六	五、八	一、三	一、七	一、三	一〇〇・〇
三、九、二	四、三、八	五、八、三	四、三、七	八、八	三、〇、三	一、八、七	一〇〇・〇
五、七	五、八	八、〇	六、二	二、六	四、三	二、六	一〇〇・〇
六、八	二、三	二、六	二、三	二、三	二、三	二、三	五、二

第一表と第二表とを對照する時は興味ある事實を發見するのである。世界的に不振な造船業

の様な工業もある、又棉工業の如く或種の國に於ては異常の發達を遂げたるに拘らず、歐洲の或部分に於ては萎微として振はないものがある。かくの如き經濟狀態を背景とし、これが救濟の道を講せんとして國際經濟會議が發せられたのである。

三

次に國際經濟會議の重要題目たる關稅問題に移る。前項に述べた世界經濟の不安特に歐洲經濟の不振は、各國の關稅戰爭が熾烈となつてゐる結果である、國際經濟會議は斷定したのである。

戦後の混亂したる歐洲の經濟界を救濟する爲めには種々の段階の努力が拂はれたのであつた。第一は貨幣價值の下落及び財政の紊亂を防ぐ事であつた。かのブラッセル財政會議の當時の如きバランスのとれた豫算を立てゝゐる國は歐洲に僅か四ヶ國と云ふ氣の毒な有様であつたが、今日では面目を一新したのである。第二の障害たる資金の欠乏は中歐諸國に著しい現象で

あつたが、これ又救済せられ、近來に於ける利子の低下は此方面の改善を示してゐるのである。第三は貿易上の障害である。大戰終了直後は極めて露骨な貿易政策が行はれ貿易禁制品、免許制度などが其代表的のものであつたが、これ亦時の経過と共に消失したのである。然るにそれに代つて起つたのは關稅戰爭である。結局貿易上の障害の第三のもの即ち關稅戰爭たる最後の障害を除く事が、世界の平和をはかる重要手段なりと云ふ結論に達した譯である。

關稅が貿易に及ぼす障害に關しては大體三つの事實を擧げてゐる。一は關稅々率が高い事と、二は關稅の稅率の定め方が複雑を極めてゐる事と、三は關稅々率が動搖常なく當事者に不安の念を抱かしむる事との三つがこれである。

關稅々率が高いとか低いとかは日常會話に上る所であるが、然らば關稅々率の高低を如何にして數字的に表現するかとなると、行き詰まらざるを得ないのである。關稅々率の高低を示す

最も簡單なる方法として、關稅收入が貿易額に占むる割合を算定する人があるが、これは非常な間違である。もし此數字が正しければ英國の關稅々率は佛國の三倍以上に上り、更に獨逸、加奈陀は米國よりも高率の關稅を課してゐると云ふ様な結論に達せねばならぬ。思ふに、保護關稅なるものは、その收入が零となる時に初めて其目的を達した譯である。従つて關稅々率が重くなり其結果輸入を防遏し得ればし得る程、關稅收入が貿易額に占むる割合が減少すると云ふ矛盾の結果に陷るのである。この弊害に顧み、國際聯盟では極めて骨の折れた計算方法をとつて關稅稅率を算定してゐる。その一は國際貿易の上で重要な貨物七十八を捕へ、その輸入統計につき關稅々率を平均する方法である。その二は二百七十八の貨物につき、その重要輸出國の輸出價格を標準とし關稅を算定するのである。第二の方法により計算し、國際聯盟では、次の關稅々率を得たのである。

第三表

世界各國に於ける關稅率の比較表

凡ての貨物	精製品	アルゼンチン													
		一九一三年	一九二五年	一九一三年	一九二五年	白耳義	加奈陀	佛抹	獨逸	印度	伊太利	和蘭	ポーランド	スペイン	瑞典
		二六	二六	二六	二六	七	八	九	二	二	一七	三	三	三	七
		元	元	元	元	八	六	六	三	二	七	四	二	四	二
		二六	二六	二六	二六	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
		元	元	元	元	九	九	六	二	二	八	四	二	二	二
		二六	二六	二六	二六	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
		元	元	元	元	七	五	三	三	六	三	六	三	三	五

第三表を見ると、凡ての貨物及び特に精製品に於て關稅稅率が戰前と戰後に如何に變化して

ゐるかが明かとなるのである。精製品に於て關稅稅率が益々重くなつてゐる事、これが歐洲經濟界の復活を妨ぐる重大なる障害である。關稅稅率の高い事は、その複雑なる事とその變化常なき事と相結んで、各國經濟界に超ゆべからざる障壁を設けてゐる。國際經濟會議が、專らこの問題に議論を集中したのは理由ある事である。

關稅の問題に關しては保護貿易主義によるべきか又は自由貿易主義を奉すべきかの原則的問題を解決せねばならぬのである。然し國際經濟會議にて此議論をそれ迄は推し及ばさなかつた。只この關稅の大障害に對し何等かの緩和手段に訴へねばならぬと云ふ一點に至つては、各代表の意見の一致する所であつた。

四

以上、國際經濟會議の中心問題につき一瞥を加へたのである。

茲に注意すべきは、國際經濟會議に列席した人々は各國政府より選ばれたのであるが、然し

決して各國政府の代表でない事である、従つて國際經濟會議は代表の政府に對し何等の拘束力をも有してゐないのである。此點は一方國際經濟會議の缺點であるが、同時に又一つの特徴をなしてゐる。蓋し各國の代表は政府の意見に捕

へらるゝ事なく自國の立場よりして勝手な意見を陳述するを得、従つて各國の輿論たるものが果して那邊に存するかを明かにする事が出来たからである。更に又拘束力無き點であるが、これを以て直ちに國際經濟會議を輕視する理由とする事は出来ないのである。かの七年前に開かれたブラッセル會議なるものは陳腐にして且つ空想を説く會合に過ぎずとして嘲笑せられてゐた。然るに、其後の通貨の整理及び財政の改革なるものは、全くこの財政會議の定めた軌道を辿つて行はれたのである。従つて形式的拘束力を有せざる事は、決して國際經濟會議の實質的功績を沒する事とならないのである。其後 *onomist* 誌の報ずる所を見るに、獨逸を始めとし歐洲の諸國が、國際經濟會議の決議せし勸告

をして意義あらしめんと折角努力してゐるのである。かくして、國際經濟會議は事實上に於て或種の拘束力を有する事となるであらう。

只問題となるのは、國際經濟會議なる廣汎なる名稱と此會議の内容とが必ずしも一致しない事である。國際經濟會議と云へば、苟も國際經濟に關する限り如何なる問題をも提出すべく如何なる問題をも討議すべきである。然し凡ての會議は大體に於て始めに豫想せられたるプログラムにより導かれて行くものであつて、國際經濟會議も其例に洩れないのである。已に繰り返へしたるが如く、準備委員會は聯盟事務局をして歐洲經濟界復興特に關稅の障壁の材料を蒐集せしめ、その方向に於て會議を準備したのである。従つて國際經濟會議と云ふも、凡てが歐洲本位に組み立てられ問題の重心が殆んど關稅問題に終始したのは當然の事であらう。我國に於て此會議に餘り多大の期待を持ち過ぎたる反動としてその決議する所を讀んで失望する論者のあるのを見受けるのであるが、これ會議の罪でなくして、寧ろ、過重したる人の罪であらうと思ふのである。